

パサルガダイのあれこれ

伊藤 義教

パサルガダイといえば、ハカーマニシュ王朝の遺跡としてだれもが想起する地の一つである。地名の由来については異説があるが、「ペルシア人の本営、みやこ」などが近いであろう。北東12kmにあるモルガブの町と区別してメシュハッデ・モルガブとよばれている。ここで最も有名なのは大王クルシュ二世（在位 559—29）の墓で、一般にはタフテ・マダレ・ソレイマーン「ソロモン王母の宝座」とよばれている石造りの建造物である。現在、この王墓には、ほかに昔を偲ぶかたみはないが、かつてはそれに碑文があったといわれる。それはアレクサンドロス大王がこの王墓に見参したときの様子を伝えたアリストプロスによるものである。もっとも、アリストプロス自身の直接的筆記としてではなく、アッリアノスとストラボンに引用されて伝えられているものである。アッリアノスはその著『アレクサンドロスの遠征』6・29・5において、アリストプロスによるとこの墓には次のような刻文があったといっている。

人よ、余はカンビッセスの子キュロスである。ペルシア人のためにこの帝国をさだめたもので、アジアに王たりしものである。それゆえに、この記念を余に吝しんではならぬ。

ストラボン（15・730）は「カンビッセスの子」という句がないだけで、ほかは殆んど同じである。この刻文は古代ペルシア語を忠実にギリシア語訳したもので、「余はキュロス—カンビッセスの子—である」という書き出しにもそれが明らかにかがわれる。だから、われわれはこのギリシア語文を即座に古代ペルシア語文に復原することができる。もっとも、「アジアに王たりしもの」というのはギリシア的で、原文では「この土に王たりしもの」という表現だったと思われる。またわれわれは、このほかオネシクリトス（これもストラボンに引用されているもの）によると「諸王の王たる余キュロスここに横たわる」という文が、同じペルシア文字をもって、一つは古代ペルシア語、もう一つはギリシア語でしるされていたという。この刻文もおそらく事実であろうが、ペルシア文字というのは例の楔形文字のことであろう。一つが古代ペルシア語版というのは

問題はないが、のこるもう一つがギリシア語であったというのは誤りで、おそらくエラム語版であったに相違ない。残念なのは、殊に上に挙げた長文の方が滅失したことである。これが現存していたならば、いろいろな意味で学界は大きな裨益をえたことであろう。

さて、アレクサンドロス大王が見参したときのクルシュ王墓の状況であるが、これも上掲したアリストプロスを典拠としてアッリアノスやストラボンが詳細に伝えている。それによると、王墓は水の貫流する苑林のなかに位し、廟宇のなかにはバビロンの絨緞と毛皮で飾った、黄金脚の棺架があって大王の遺体をのせ、その上にはバビロン出来の王の頭衣その他の衣裳が、メディアの袴衣、鎖、短剣ならびに宝石をちりばめた黄金の耳環といっしょに並べられていた。まさしく実録であって、これを疑う権利はない。ところが、このような取扱い方がクルシュ自身の遺詔に基づくのかどうかということになると、問題が出てくる。問題というのは、クセノポンの『キュルバイディア（キュロスの教育）』である。クセノポンが描き出したキュロスというのは、クルシュ二世のみでなく、その祖父同一世（ca. 645—602）をもないまぜて作りあげた理想像である。しかし、クセノポンがそのような「キュロス」の時代として描いている政治や社会の状況、それに帝王の心理などはどうみても大王クルシュ二世やその時代のものである。ペルシアといえばギリシア人にとっては不倶戴天の敵であるが、そのような敵ペルシアのキュロスなるものを理想像としてクセノポンが描いたについては、大王の人格的高貴さがかれを深くとらえたからである。このことは捕囚（B.C.586）の民としてバビロニアにいたイスラエル人にパレスチナ帰還（B.C.538）を許したことでわかる。さてクセノポン（『キュロスの教育』8・7・25）によると、キュロスは臨終にこのような遺言をのこしている。

さて、余が遺体のことであるが、わが子らよ、余の死せんとき、汝らはそれを黄金のなかにも、白銀のなかにも、ないし、その他のいかなるものなかにも置くことをせず、できるだけ速やかに大地に托せよ。けだし、美しいすべてのものと佳きすべてのものを生みか^{はぐ}つ育くむところの大地と一つにされることよりも、何ものか、能く、より幸いとされるであろうか。余はいつも人類の友であった、それゆえに今、余は、この人類を利益^{えき}するものと喜んで抱合しようと思うのである。

これはクルシュ王墓の実況とは、はなはだしくかけ離れている。はたして大王の真意はどちらにあったのであろうか。参考になるのはフェルドウシーの『シャーナーメ』である。それによると、アレクサンドロス大王はおのが遺体の取扱いを書簡に託して、つぎ

パサルガダイのあれこれ

のように伝えている。

まずお身たちは黄金の函をつくれ。お身たちは余が遺体の上なる屍衣を竜涎香で充たせよ。／そ（の屍衣）は余にふさわしい、支那の錦の衣でありたい。だれでも余に侍ることを怠ってはならぬ。／余の函のすきまはみな、瀝青、樟腦、麝香および竜涎香でふさげよ。／まず、お身たちは中に蜜をみたせよ。蜜の上下は支那の金欄（をもっておおえよ）。／そののちに余の遺体をその中におけよ。お身たちが（余の）^{おもて}面を覆うとき、余のことは終わるのである。

さらに詳細をきわめるのは、『シャーナーメ』に伝えるサーサーン朝王ホスロウ一世ノーシールヴァーン（在位 531—79）の場合であって、これも劣らず豪華をきわめているが、紙数の関係上ここでは割愛したい。

こうした伝承をみると、クルシュ大王墓の実況とまさしく一致するもので、クセノボンがキッロスをして遺言させている処理法のごときは、クセノボン好みのキッロス、ソクラテス的賢者としてのキッロスをして発言させているものにほかならないのである。クルシュの王墓めぐりはこれくらいにして、その北東 2 km 余にある石造建築の遺壁をとりあげてみよう。ゼンダーネ・ソレイマーン「ソロモンの^{ひとや}牢」またはカブレ・カンブジャ「カンブジャ（カンピウセス）の墓」とよばれるもので、遺構からみると、ナクシュ・ロスタムのダーレヨージュ二世王墓の前にあるカアバ・イエ・ゼルドシュト「ゼルドシュト（ゾロアストラ）のカアバ」とよばれる、角型の塔と同じものであることがわかる。そうすると、どちらか一つの用途目的が判明すれば、他方もおのずと明らかになる。カブルの方はわずかに入口のある壁体をのこすだけで、他の壁面はみな崩壊してしまった。カブレ・カンブジャとよぶので、むしろこの方をクルシュの墓だと主張する人もある。それはさておき、カブルの本来の用途は何か。ジャクソン教授ははやくこれをカアバと同じく fire-temple だと考えた。エルドマン、ウィカンデル、ヒンツらによっても支持された。もっとも、fire-temple といっても火がどのようにしてここで崇められたかについては必ずしも一致しないが、カアバはみせかけの化粧窓（三層）をそなえているだけで、開口部といえば入口のみの建物であるから、火と関係させるのなら、アーテシュ・ダーンとして聖火をもやすには不適切であるし、従ってアーテシュ・ガーフとして、いわば火種を保持するくらいが関の山であろう。カアバから少し離れたところにアーテシュ・ダーンがあるから、拝火の行事を行うにはその方が用いられたのではないか。また別の見方としては宝蔵、^{ふみぐら}文庫などとみる向きもある。困ったことには、カブルにしてもカアバにしても、どういう目的に使用されていたのか、古い記録にその点

を伝えたものがない。カアバについては、そこにあるカルテールの刻文（シャープール一世の刻文ペルシア語版の下にある）では、それはブン・ハーナグ（bun-xānag）とよばれている。ハーナグは近世ペルシア語ハーネ「家」の中世語。問題はブンである。ブンとは「根源、根本」という意味が本来のものであるが、『アヴェスター』をさしてブンという場合がある。おそらく『本典』として、末註・末釈としての『ザンド』（『アヴェスター』を中世ペルシア語で訳註したもの）に対立させた考え方であろう。そうすると、ブン・ハーナグというのは『本典』（またはその原本）をおさめておく建物、経蔵といった意味になり、ディゼ・ニビシュト「文庫」と称せられるものとも同一視することもできる。しかし、それにしても、ゾロアストラのカアバであるとか、ブン・ハーナグであるとか——どうもゾロアストラ教的に抹香くさい。どうもアクがつよすぎるような気がする。そこで筆者は一つ、新しい考え方を提唱してみたい。それはこの種の建物は入口だけが開口しているだけで、ここを閉ざせば中は暗黒になるという点に着目したもので、ミスラ密儀の執行されていた聖所ではなかろうかというにある。

提唱の出しっぱなしというわけにもいくまいとすれば、何か根拠や理由といったものを挙げなければなるまい。だが、これとって convincing なものの持ち合わせもない。カアバをみると化粧窓がいかにも三階建てを思わせるようになっている。「三」の数字は古来イランではシンボリックな聖数として、随所に登場している。だから、カアバの三層化粧窓を何かのシンボルとして意義づけることはできる。筆者の提唱からすれば、ミスラ神とそれに陪侍する二神バガとアルヤマンを考えることができる。この三尊の形式は欧州の諸所にみられるミスラ密儀のレリーフでも、ミスラ、カウテス、カウトパテスとなってあらわれている。例えばヘッデルンハイム（フランクフルト・アム・マインの近く）で1826年発見された砂岩レリーフのごときがそれで、屠牛中のミスラに二尊の脇侍するのがみられる（ヴィースバーデン市立博物館蔵）。しかしカアバの三層窓をこのように意義づけるよりも、むしろ聖数「三」に因んで三層窓を配することそのことによって聖所たるの資格を得たと解するほうが、真相をうがっているものようである。極言すれば、イラニストは聖数「三」を由緒ありげに意義づける作業には、もう飽き飽きしているのではないか。そうしたことのセンサクよりも、筆者の提唱に立つかぎり、カアバなりカプルなりが、その後どのような運命に見舞われたかを追求してみるほうが、はるかに意義ぶかいようである。

ミスラ密儀はもっぱら暗黒の場をえらんで行われた。そのような儀礼が古代イランで行われていたかについては、ギリシアやラテンの作家たちはいずれも沈黙を守っている。

バサルガダイのあれこれ

ブルタルコス(『イシスとオシリス』46)の伝えているアレイマニオス(アンラ・マンユ, アフリマン)密儀の場面は, 暗黒裡での行事のみミスラ密儀と共通しているが, 両者は同じものではない。しかし筆者からすれば, 古典作家たちの沈黙には理由があるし, そのことはあとでだんだん明らかとなってくるはずである。それにしても, ミスラ密儀ですぐに想起されるのは『ガーサー』である。そのヤスナ 32₁₀によると, 牛と太陽を, 眼をもって見るに最悪のものと称するやからはゾロアストラの教えを毀つものであると非難されている。この頌句をこのように解することが唯一の正解であることは, 筆者が他の頌句を新しく解読することによってはじめて裏付けられた。その頌句とはヤスナ 50₂, 1. 3 で, 従来は「太陽を見る (pišyasū) 多くの人々のあいだにあって」と解されていたがそうではなく, pišyasū は「忌む」という意味なのである(拙稿「Gathica」[『Orient』 Vol. 3] p. 11 & n. 29; 「ガーサー語彙の研究」[『オリエント』 Vol. 9, No. 1] p. 15 & n. 27 および「ゾロアストラ周辺論」[『東洋史研究』第26巻第1号] pp. 73—74 参照)。これらのガーサー頌句はおそらくミスラ密儀をさしているものであろうが, そうすると, カブルもカアバもゾロアストラの教義とは相容れない施設となる。ところで, ハカーマニシュ王朝の諸王がダーレヨージュ大王以来オーラマズダー(アフラマズダー)を尊崇していたことはかれらの碑文に明らかである。論者のなかには説をなして, このオーラマズダーはゾロアストラのアフラマズダーとは異なる, いわば通イラン的至高神の一で, ゾロアストラのものはこれをゾロアストラ的に受容したものであるとするものもあるが, 筆者には受けいれがたい。碑文のオーラマズダーはゾロアストラの創唱にかかるアフラマズダーを受けついだものであり, ゾロアストラの教義とこの王朝との出会いはすでにクルシュ二世時代に発するものと筆者は推測しているし, この王朝はやはりゾロアストラ教徒であると考えられるものである。もっとも, 帝王が多民族に君臨する以上, 純一無雑のゾロアストラ者であることはむずかしい。かかる立場からみれば, 非ゾロアストラ的要素が見いだされても, 非ゾロアストラ的烙印を押しうる根拠とはなりえぬであろう。こうした見方からすると, クルシュやカンブジヤの場合とちがって, ダーレヨージュ大王以下の諸王がおおむね, その王名に宗教・倫理的——それもゾロアストラ的なる——な意味をそなえている点は, 何か決定的なものを有しているようである。なかでもダーレヨージュ一世がそうで, 楔形文字を忠実に写せば Dārayavauš となるが, これを共通イラン語形に改めれば Dārayat-vahuš となり, アヴェスター語でなら Dārayat-vohuš となる。「善きもの (vahu-) の護持者 (dārayat-)。これは現在分詞)」の意味であるが, 「善きもの」とは「善き心, 善思」(vohu- manah-) の略と

みることができるから、王名は「善思（ウOFF・マナフ）の護持者」ということになる。『ガーサー』のヤスナ 31₇にはアフラマズダーを讃えて「最勝のウOFF・マナフを護持してましますもの」（……dārayaṭ vahištəm manō）とある。両者を比較するだけでも Dārayavauš は名詮自性、かれがゾロアストラ者であることを遺憾なく示している。しかし大王にはミスラ神崇拝の事実も否定できない。カンブジャ二世の歿後、王位継承者を決定する場面がヘロドトス（『歴史』3・86）によって伝えられている。ダーレヨーシュが他のライバルたちと馬に乗って啓示を待つのだが、かれの乗馬が最初に嘶くと同時に晴天から稲妻が閃き雷鳴（アストラペー）が轟いてかれの王位継承者としての資格が決定した、とある。アストラペーとはミスラ神の主要武器たる雷箭（ワズラ）にほかならない（『アヴェスター』ヤシュト10₉₆以下）。帝室の守護者ミスラ神が影臨したのである。ミスラはのちになって（アルタクシャシャー二世〔404—359〕）碑文にアナーヒターおよびオーラマズダーと並んで登場するが、ミスラ神の崇拝はそれを待ってはじめてあらわれたものではない。そのみでなく、ミスラカーナの祭儀が毎年執り行われていたことも周知の事実である。しかしミスラ神崇拝の事実がこのように蔵存しているにもかかわらず、ミスラ密儀にみられるごとき、暗所での屠牛儀礼を伴うものは報告されていない。そうすると、カブルやカアバでかつてそれが執行されていたが、ゾロアストラ教受容後はそれが廃止されたと考えることができる。こういう考え方をするなら、カアバがゾロアストラのカアバとよばれたり、ブンハーナグと呼ばれたりしても、それは、カブルやカアバの最初の目的とは何の関係もない、転用後の二次的な用途に由来するもので、さきに触れたように、それはこれらの建造物のその後の運命を物語るものにほかならないであろうし、古典作家たちの沈黙云々もおのずと理解されるであろう。

この小論中、クセノポンの態度についてはクリステンセンをはじめとするイラニストの間に定見があるが、カアバに至ってはそれがない。従って筆者はこのような考え方がいかに評価されるかを全く知らない。イランの土を踏んだこともない末学の筆者に比し、イランへは近時多くの学者の渡往が踵を接している。そうしたかたがたの高教をこの小論に仰ぐことができるならば、筆者望外の幸いというものである。

（筆者は本誌編集部員）